

## 08年度出荷7,380頭で今年度は8千頭目指す、食育事業などにも積極参加 - TOKYOX

TOKYO-X(以下:東京X)の流通・販売事業者らで構成する「TOKYO-X ASSOCIATION」(会長=植村光一郎・ミートコンパニオン常務執行役員)は11日、東京都内で2009年度総会と協会設立10周年を記念した消費者交流会を開いた。東京Xの生産農家は27戸で、販売認定店は185店舗に上る。08年度の出荷実績は7,380頭と前年度から300頭ほど増加した。今年度も枝肉引取価格700円(kg)を維持しつつ増頭を図り、8千頭出荷を目指していく方針だ。また、東京Xを通じて食育活動に積極的に参加、「おいしさ」や「安全・安心」といった特徴だけでなく、環境への配慮や農家のこだわりなど“東京Xのおいしさ”の裏に隠れている特徴を伝えていく。

総会で植村会長は、これまでの会の歩みについて「97年に(東京Xを開発した)旧東京都畜産試験場から生産農家に配布され、98年10月に本格販売が開始された。99年に設立総会が開かれ8業種の代表で役員会を設けた。第一次銘柄化ではまず食べてもらうことを行い、2000年の第二次銘柄化戦略ではエリアを限定し『生活に根ざしたブランド』を旗揚げし、背伸びをしない販売戦略を取り、07年度からは広く情報発信を行い始めた」と回顧。その上で「今までの10年は東京Xのおいしさを説いてきた10年。これからの10年は今までの10年を礎にして、おいしさの後ろにある生産者のこだわりや思い、そしておいしさの訳を説いていく10年にしたい」と、さらなる消費者ニーズの把握とアピールを行っていくと力強く語った。

09年度事業では、共同生産出荷に関する協議 流通、販売等の検討・実施 枝肉目合わせ会の実施 トレーサビリティ検討委員会 積極的な認知活動の実施 食育事業参加 生産拡大委員会 に加え、アグリネイチャー事業参加、レギュラトリーサイエンスの取り組み(食品や環境、医薬品などにかかる安全性の評価科学)といった活動も展開していく。

総会後に開かれた消費者交流会では、協会関係者や消費者ら200人が参加。HATTORI食育クラブ会長の服部幸應氏と日本獣医生命科学大学の松木洋一名誉教授と植村会長を交え、東京



Xを通じて「食育」「アニマルウエルフェア」「日本の農業」の観点からディスカッションが行われた。服部氏は食育には「選食力を養う」「マナーやしつけ」「地球規模で食を考える」の三本柱から成り立つと指摘。また、都道府県ごとの食料自給率に触れ「東京都の自給率は1.2%、北海道は195%。自分たちが住んでいる所の自給率を知らない人は多い。自給率を上げていくためには自分たちの地域で取れた食材を買って欲しい。東京では少ないかもしれないが、繰り返すことで自給率を上げてもらいたい」と述べた。一方、松木氏はアニマルウエルフェアとは、単なる偽善的なものでなく、家畜の生理的行動要求に合った飼育環境を整備することでストレスを軽減、病原菌への免疫力を高めて健康と福祉を実現。その畜産物を通じて人の健康が実現すると説明。家畜福祉畜産直接支払制度を創設したEUのように、生産者・政府だけでなく消費者(納税者)からも納得を得られる政策を進める必要があると強調した。



植村会長は、「アニマルウエルフェアを形にするには食育が必要であり、買う人たちが生産者を支えている。本当に良いものを買ってもらえるようになると、

そうしたものを生産してくれる農家は残っていく。鮮度など食材に強いこだわりを持つ日本でそうしたことが続けば、日本の畜産は日本一になる」とまとめた。討論後に開かれた試食パーティーでは、(株)二幸、(株)人形町今半、セントラルフーズ、TOKYO-X生産組合の榎戸武司会長、吉岡幸彦氏(東京Xを世田谷区で育て、アニマルウエルフェア、都市農業を实践)に植村会長から記念盾が贈られた。